

国語 その一 (七枚のうち)

一

次の文章は『記憶する体』という本の一部です。これを読んであとの質問に答えなさい。

インタビューしたとき、西島玲那さんは三〇代に入ったばかりでした。完全に見えなくなったのが一九歳のときなので、それからすでに一〇年以上が経っていました。

彼女の目が急激に見えにくくなったのは、一九歳から少しさかのぼって、高校一年生の夏休みのこと。生まれつき視野が狭い、夜盲、色弱、といった症状があり、一〇歳で網膜色素変性症の確定診断が出たのですが、五年経ってそれが発症したのです。

「その日一日で、スポンと見えなくなりました」。彼女のそのときの視野は五度以下になっていたといいます。視野五度と言えば、視線を向けている先にあるものだけが見えている状態。パワーポイントにたてるなら、ポイントの光が当たっているところだけ見える、といった感じでしょうか。吉野家の看板を見ても、オレンジしか見えなかったと彼女は言います。そこからさらに視力が低下していき、一九歳で完全に失明しました。

ところが興味深いことに、高校一年生で急激に視力が低下したとき、玲那さんは、その変化にすぐには気がつかなかったと言います。「おうちの中で急いでいたので、気がつかなかったです。母とくらししていたのですが、いつもと同じように準備をして、ご飯を食べていました。家を出て、アパートの階段を降りて、陸に着地したときに『あれ?』と思った。何見てるんだろう、って」。

当時玲那さんは高校の雪上滑走競技部(スキー部)に所属していて、夏休みの練習に参加しようとしていました。しばらく寝込んでいたので、久しぶりの参加になる予定でした。家を出るにあたって、顔を洗ったり、着替えをしたり、朝食を食べたり、といった準備があつたはずですが。しかし、そのあいだ、彼女は自分の目がほとんど見えていないことに気がつかなかった。それに気づいたのは、ようやくアパートの外の駐車場に出たときでした。

なぜ彼女は気がつかなかったのか? 理由として考えられるのはただひとつ、彼女はもともとあまり見ていなかった、ということ。先述の通り、玲那さんには、もともと見えにくいという症状がありました。それゆえ視覚に対する依存度が低く、周囲を認知するための手段として、視覚の占める割合が相対的に低かったと考えられます。代わりに、触覚や聴覚や嗅覚を使って認知する習慣があつた。だから視覚がなくなったとしても、情報量が大きく減つたと感じることはなかったのです。

家の外に出て初めて気づいた、というのも興味深いポイントです。家の中は、外に比べるとはるかに安定した環境です。私も経験がありますが、引越した直後は、柱の角や洗面所の角にやたら足や肩をぶつけます。でもしだいに体が*チューニングされ、家のサイズや凸凹にあつてくる。照明をつけなくてもストロープのスイッチを入れることができるし、机の上にカバンを置くことができるようになります。

つまり、家の中とは、よい意味で「思い込み」が通用する空間です。思い込みで動けるならば、細かく観察しようというスイッチを切ることができる。そもそも細かく観察する必要のない空間だったから、玲那さんは、自分の見え方の変化に気づくことがなかったのです。外に出たとたんに気づいたのは、観察スイッチが入ったためだと考えられます。

ちなみに意外な感じがするかもしれませんが、「失明したことに気づかなかった」というケースは玲那

国語 その二（七枚のうち）

さんだけの特殊なものではないようです。実際、私もこれまでに複数人、そのような人に出会ったことがあります。急な事故でもないかぎり、「気づいたら失明していた」という場合が意外と多い。よく失明をあらわす比喩として、「ろうそくの火が消えるように」という比喩が使われますが、あれは必ずしも正しいのかもしれません。

さて、これが彼女の辿ってきた見え方の変遷の大枠です。インタビューの最初は、たいていこんなふう
に、*インタビューのバックグラウンドを共有するところから始まります。聞き手である私は、どの点
についてさらに突っ込んで聞こうか、頭のなかで質問を考えています。

ところがこのとき、私は彼女の話をもっと聞いていませんでした。まったく別のところに気を取られ
ていたのです。それは、ずっと働き続けている彼女の手、なめらかに動くその手でした。「一九歳で失明、
病気の発症が一五歳、確定診断が一〇歳……」。彼女は話しながら、ずっと手元の紙にメモをとっていた
のです。もちろん視覚を使わずに。

大枠を話し終えた時点で、紙は数字や線や文字で埋め尽くされていました。「15↓16||高2↓1985
↓30歳」と段階を示す年齢が座標軸のように書かれ、横にそのときの居住地や感情が書き加えられてい
ます。

書いているあいだ、玲那さんが指で筆跡を確認することはありませんでした。傍目には、目の見える人
がメモを取っているのと何ひとつ変わらない手の動き。見えなくなつて一〇年間、書く能力がまったく劣
化せず、鮮度を保つたまま真空パックされているかのようなようでした。

使われているのは、A5サイズに折られた広告の裏紙と、先の少し丸くなった鉛筆。席に通されるなり、
かばんからチラシの裏紙の束と鉛筆を取り出したので、ハテナと思っていたのですが、あまりに自然にメ
モを取り始めたので、思わず質問するタイミングを失っていたのです。

聞けば、彼女は記録のためというより、自分の話を整理するためにメモをとっている、と言います。「ふ
つうにみんなやりませんか？ たとえば家の場所を説明するときに、地図を描くような感覚です。しかも女
の人つて話が逸れるから、ここのスーパードがどうか、線路がどうか、こっちのカフェがオススメとか、
話があつちこつち跳ぶ」。

もともと見えていたときから、彼女は自然に手が動くほど書くのが好きだったそうです。「書くという
動作が好き……というか好きかどうか考えたことすらなかったです。小学校のころの趣味は、お姉ちゃん
が持っている広辞苑を盗み見して、化学式を全部書いていくということでした。今だったらH₂Oが水だ
と分かるけれど、当時は『何だこれは！』と思って写してました」。そして六年間かけて、彼女はついに
広辞苑一冊分の化学式を写したと言います。

それにしても、A5サイズというのは、場所としてはかなり小さなスペースです。この小さな紙の上で、
的確に字を置いていくのはかなり難しいように思えます。いったいどうやって視覚を使わずに、この紙を
自在に使いこなしているのだろうか……。自分の手がどれだけ動いたか、その移動距離で位置を確認して
いるのかもしれない。そう思つて彼女に質問すると、「なくんも考えてない」と笑い声が返ってきました。

確かに、ただ鉛筆を動かすだけであれば、運筆の記憶がありますから、字を書くこともできそうな気が

*インタビューのバックグラウンド……取材を受ける人の生い立ちなど。

国語 その三（七枚のうち）

します。運動の熟達はしばしば視覚の排除を伴うからです。

たとえばボタンかけ。目で見ながらでなければボタンを留められなかった子供も、成長するにつれて、手元を見ずに、たとえば背中についたボタンでさえ留めることができるようになります。日常生活の大部分は反復的な行為から成り立ちますから、「見ない」傾向はしだいに増大します。先ほどの「失明に気づかなかった」という話とも関連する現象です。

ところが、玲那さんはただ鉛筆を動かせるだけではないのです。何と、さつき書いた場所にもどって、強調するために文字や数字を丸で囲ったり、アンダーラインを引いたりすることができるとは、先述のとおり、その間、玲那さんが紙を手で触って、書かれた文字や数字の痕跡を確かめることはあり

ません。「レーズライター」という、視覚障害者用の筆記用具がありますが、これは薄いセロファンにボールペンで書く仕様で、触覚で筆跡を確認します。

ところが玲那さんが使っているのは、タネも仕掛けもないチラシの裏紙と鉛筆。まさに「見えているように」としか言いようがないほど自然に、数分前に書いた文字に「リーチできるのです。

この能力がさらに発揮されるのは、地図を描くときです。地図とは、文字や図形が書かれた位置こそが意味を持つ書記です。家が、道として引いた線のどちら側にあるのか。線路は、その道に対してどういう角度で交わっているのか。要素間の空間的な関係は正確でなければなりません。玲那さんは、こうした地図も、やすやすと描いてみせるのです。

それまでに書いた要素にリーチできるということは、玲那さんが、紙に書かれた内容を頭のなかで映像的にイメージしていることを意味します。つまり、玲那さんは手の運動の記憶をただ再生しているわけではなくて、まさに紙を「見ている」のです。

その証拠に、書くときに文字のスタイルを意識することがあると言います。「自分の名前を斜めに書いたりすると、イメージが浮かびます。賢そうに見せたいときは、賢そうな字体で書きます」。つまり、玲那さんの中では、文字は抽象的な意味に還元されない、形をもった視覚的イメージなのです。

見えていた一〇年前までの習慣を惰性的に反復する*手すさびとしての「書く」ではなくて、いままさに現在形として機能している「書く」。私がまず驚いたのはそこでした。全盲であるという生理的な体の条件と*パラレルに、記憶として持っている目の見える体が働いている。まさにダブルイメージのように二つの全く異なる身体がそこに重なって見えませんでした。

確かに体には*可塑性があり、障害を得た前後で体の*OSそのものが更新されるような変容が起こります。障害を受けた部分だけではなく、それをカバーするように全身の働き方が変わるので、このことは脳科学によってもさまざまな事例が報告されています。たとえば、全盲になると、脳の視覚野が、見るためだけでなく点字を理解するために使われるようになる場合があります。

ところが、一〇年間真空パックされた玲那さんの「書く」能力は、このような変容に対して全く逆行する例です。もちろん、玲那さんの体にも可塑性があり、失明によって変容した機能もあるはずですが、視覚

*リーチ……到達。

*手すさび……ひまな時間をつぶすために手を使って何かをすること。

*パラレル……平行。

*可塑性……自在に変化することのできる性質。

*OS……コンピュータを動かすための土台となる基本システム。

22	受験番号
中	

国語 その四（七枚のうち）

が使えなくなつた分、反響音を利用して空間を把握する力は、格段にアップしているでしょう。

けれども少なくとも「書く」という行為については、失明という要因によって変化を被ることなく、むしろそのまま保守されている。むしろ、OSが書き換わっているのに、従来のアプリケーション（＝書く）がそのまま動き続けていることに驚きを禁じえません。

*プロローグでお話したように、そこにあるのは、見える体と見えない体の二つを使いこなす「多重身体」とでもいふべき状態でした。視覚の喪失という身体的条件の変化によって劣化することのない、現在の形の「書く」。それはまるで一〇年という長さをショートカットして、ふたつの時間が重なつたかのような、不思議な感覚でした。

「書くという運動」と「書かれたもののイメージ」がセットになつて現在の形の「書く」が成立する。このことについてもう少し考えていきましょう。

私たちは、書くことに限らず、何らかの行為をするとき、感覚として知覚した情報を手がかりに、運動を微調整しています。陸上の一〇〇メートル走で自分のコースをまっすぐ走れるのは、地面に引かれたラインを見て、そこからはみ出ないように着地する位置を調節しつづけているからです。

この知覚情報の運動への*フィードバックが、人の体と空間を結びつけます。このようなりアルタイムの運動調整を実現するうえで、視覚が重要な役割を果たしているのは言うまでもありません。

運動のなかでも、とくに「書く」は、非常に複雑なフィードバックのシステムを持ちます。陸上のライオンに沿って走る場合と違って、「書く」は意味を生み出す運動だからです。もちろん、「書く」にも、鉛筆を持つ時の位置や長さや筆圧など、純粹に運動レベルのフィードバックのシステムがあります。けれども、それには還元できない、意味に関わるフィードバックのシステムが、「書く」には存在するのです。

たとえば、筆算をする場合を考えてみましょう。287×859という掛け算は、多くの人にとっては暗算では困難な計算です。しかし、紙と鉛筆さえあれば、小学生であっても解くことができます。つまり、暗算ではできない思考も、筆算によつて、つまり「書く」ことによつてならめるのです。

暗算で行う場合、私たちはすべての計算の*プロセスを頭のなかに保持しつづける必要はありません。けれども筆算の場合には、大きな計算のプロセスを小さなプロセスに分け、書かれた文字に対して足したり掛けたりといった機械的な操作を行えばよいこととなります。「書く」は「考える」を拡張する手段になるのです。

ここにあるのは、紙に書かれた情報と対話するようにして進める思考のあり方です。もともと、こうした対話の相手は必ずしも「紙」には限りません。計算をするにしても、「そろばん」を使うこともあるかもしれないし、算数を習いたての子供なら「おはじき」を使うでしょう。

いずれにせよ重要なのは、私たちが何らかの物を操作し、その結果を視覚的にフィードバックすることによつて、思考を容易にするということです。体と物と視覚のあいだにも、思考が存在するのです。

思考というと、頭のなかで行う精神活動のように思われがちです。しかし必ずしもそうではありません。

*プロローグ……前書き。

*フィードバック……ある動作や行為などの結果を見て調整を加えること。

*プロセス……手順。

国語 その五（七枚のうち）

認知科学者のアンデイ・クラークは、* テトリスの例をあげながら、この能力について語っています。テトリスをプレイするとき、私たちは落ちてきたピースをくるくる回転させます。あるいは左右に平行移動させてみるかもしれません。

こうした操作をなぜ行うのかといえば、とりもなおさず、「考えるため」です。どの向きでピースをはめれば、画面の下に堆積しているブロックがつくる谷の形に適合するか。あるいは、さまざまな谷のどこにピースをはめ込むのが、最適な選択か。

落ちてくるピースをただ眺めていただけでは分からないのに、それを回したり移動させたりすれば、おのずと答えが見えてきます。私たちは「見ながら考える」、つまり視覚的なフィードバックを組み込むことで、自分の脳だけではとうていできないような複雑な思考を、簡単にこなすことができます。

このように目の見える人たちは、物と体を視覚でつなぎながら、運動のさなかにリアルタイムの調整を行ったり、思考を容易にしたりしています。

一方、目の見えない人の場合、こうした視覚的なフィードバックは、運動レベルにせよ、意味レベルにせよ、ふつうは用いることができません。視覚を通して入ってくる情報がないために、本来的に、空間と体が切り離されがちなのです。

ガイドなしで一〇〇メートルまっすぐ走るのとは不可能に近い業ですし、道に迷ったりすると、周囲の様子が分からず白紙の上に立っているような感覚になるといってもいいかもしれません。もちろん、聴覚や触覚を使って空間の様子を把握することはできます。しかし、リアルタイムのフィードバックとなるとやはり視覚は優位です。

ところが、玲那さんの「書く」は、運動と意味の両面において、視覚的なフィードバックの経路に組み込まれています。それまでに書いた文字にリーチできるといふ点で視覚的な運動制御がそこにはありますし、書くことで頭の中が整理されるという点で、意味的な制御にも関わっています。

もしこれが単なる「運動記憶の再生」であったなら、決められたプログラムのようには、周囲の空間や思考とは無関係に発動するはずですが、ところが、玲那さんの「書く」は、環境のなかで、思考と関わりながら行われている。これが、玲那さんの「書く」が現在形であるゆえんです。

もともと、視覚的なフィードバックといっても、玲那さんの場合は文字どおりの視覚を用いているわけではありません。ですから、正確には「イメージ的なフィードバック」とでも言うべきものかもしれません。玲那さんは、あくまで、頭のなかにメモのイメージを思い浮かべ、そのイメージを手がかりに別の文字や線を書き加えたり、あるいは考えを進めたりしているのです。

もともと、目の見える人だって、こうしたイメージ的なフィードバックを行います。手元に紙がなければ、頭のなかに筆算のプロセスやそろばんの珠をイメージして、それを手がかりに計算をするでしょう。

とはいえ、イメージのベースにあるのは視覚です。視覚的な経験がもとにあるから、筆算のイメージやメモのイメージが作れるのです。この意味で、イメージ的なフィードバックも、視覚的なフィードバックの一部であると考えることができます。

（伊藤亜紗の文章による。なお、本文には一部省略したところがある。）

国語 その六（七枚のうち）

問一 「理由として考えられるのはただひとつ、彼女^{かのじよ}はもともとあまり見ていなかった、ということであるが、「彼女^{かのじよ}はもともとあまり見ていなかった」とはどういうことですか。

問二 「よく失明をあらわす比喩^{ひよ}として、『ろうそくの火が消えるように』という比喩^{ひよ}が使われますが、あれは必ずしも正しくないのかもしれないかもしれませんが」とあるが、「『ろうそくの火が消えるように』という比喩^{ひよ}」とは、ここではどんな意味で使われていますか。

問三 「まったく別のところに気を取られていたのです」とあるが、筆者はそのとき何に「気を取られていた」のですか。

問四 「ところが、一〇年間真空パックされた玲那^{れいな}さんの『書く』能力は、このような変容に対して全く逆行する例です」とあるが、どのようなところが「逆行」しているのですか。

22	受験番号
中	

国語 その七（七枚のうち）

問五 「思考」というと、頭のなかで行う精神活動のように思われがちです。しかし必ずしもそうではありません」とあるが、筆者は「思考」がどのように行われると考えていますか。

問六 「玲那さんの『書く』は、環境のなかで、思考と関わりながら行われている」とあるが、それはどういうことですか。

二

次の各文のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

- ① 不況のヨハが及ぶ。
- ② 米や麦などのコクルイ。
- ③ 手にオえない。
- ④ 新しい制度をソウセツする。
- ⑤ 多大なコウセキを残した人物。
- ⑥ 絵画のテンランカイに行く。
- ⑦ フルってこの試合に参加しよう。
- ⑧ 養蚕で栄えた地域。

⑤	①
⑥	②
⑦	③
って	えない
⑧	④